

氏名	坂井 志織
所属	人間健康科学研究科 人間健康科学専攻
学位の種類	博士（看護学）
学位記番号	健博 第108号
学位授与の日付	平成28年3月25日
課程・論文の別	学位規則第4条第1項該当
学位論文題名	しびれている身体で生きる経験とその意味 一回復期にある中枢神経障害患者に注目して
論文審査委員	主査 教授 西村 ユミ 委員 教授 飯村 直子 委員 教授 河原 加代子 委員 教授 榊原 哲也（東京大学）

## 【論文の内容の要旨】

### 1. 背景

しびれを呈する疾患は多岐に渡るが、研究数は極めて少ない。特に、中枢神経障害によるしびれは、難治性という特徴もありその傾向が顕著である。先行研究においては、患者のしびれの訴えに対して、それを理解するという方向ではなく、症状緩和方法の模索が主題となっていた（登喜ら，2007；土田，土屋，2012）。患者経験に着目した研究は少なく（坂井，2008）、しびれによりどのような経験がなされているのかは、十分に明らかにされていない。今後、しびれのケアを構築していくためにも、まずは患者がどのような経験をしているのか理解する必要があると考えた。その際、しびれを患者の主観的・私秘的症状と見做したり、医学的な説明を当てはめたりすると、患者が経験していることを捉え損ねてしまう。そこで、しびれに対する既存の先入見や、研究方法を一旦棚上げし、患者の視点から経験を探求する現象学的態度で事象に迫ることを試みた。

### 2. 目的

回復期にある中枢神経障害患者のフィールドワークによって、しびれている身体で生きる経験を、現象学的記述を通して開示することである。

### 3. 方法

回復期の患者へのフィールドワークを実施し、そこで記録したフィールドノーツを主たる分析対象とした。研究参加者は、中枢神経障害によるしびれを呈する患者4名であり、本研究では3名の経験を記述した。分析は、現象学的な思想を下敷きとし、メルロ=ポンティの〈身体〉を視座として行った。フィールドノーツを繰り返し読む中で、しびれの感じ方

よりも、しびれている身体をどのように感じているか、それにより生活がどのように現れているのかということが、データの核となっていたことが明らかになり、その点を記述の柱とした。倫理的配慮は、首都大学東京荒川キャンパス研究倫理審査委員会（受付番号：13098）と施設（H25-36）の倫理審査を受け承認を得て実施した。

#### 4. 結果・考察

しびれている身体で生きる経験について、以下の通り記述し、検討した。

①しびれが局所に留まらないような、からだのまとまりを崩す様子が記述された。また、筋肉痛がわからなくなったり、便意があってもそれがしびれによるものかもしれないと、自らの感覚に疑念を抱いてしまう多様な現れが開示された。これらは、外との関係だけではなく、皮膚表面に確かめられる「自分」と、それによって生じてくる自分ではないように感じる「中がわからない」と言われる「中」を生じさせていた。このようにしびれている身体は、接触により自らのからだに「自分」と「中」という二項ができる経験をしていた。

②しびれている身体で生きることは、身の回りの物との接触に、これまでとは異なる意味を生じさせていた。雨などの滴や衣類などを「当たる」ように感じさせると同時に、気持ち悪さや嫌な感じが常に伴っていた。そこでは、常に同時に自らの「からだ」が違和感と共に現れており、何かをすることにおいて、目的よりも先に強くからだが目覚めるといことが起きていた。さらには、機能的には歩いたり、立ち座りなどの動作ができているように見えても、しびれていることで歩けないと感じたり、「こわい」と感じ、今の身体の動作可能性が、その先の保障にならない様子も記述された。これらは、これまでの習慣的身体の働きに支えられて実現しているが、しびれた身体においては、新たな動作の習慣化が難しいという事態を引き起こしていた。

③患者の経験から、しびれが「治らない」ということの意味の生成や更新のされ方が記述された。回復過程にある身体と時間経験との含みあいや、退院という制度的な区切りによって、症状や時間の意味がダイナミックに更新されており、既存の症状固定という見方とは異なる経験がなされていた。

#### 5. 結論

しびれについての既存の見方に対して、結果考察で記述された“しびれている身体”の経験から、以下の点を見出した。1点目は、しびれが神経支配領域だけに限局された経験ではないということである。しびれているという経験には、志向性がどこに、そして何に向かっているのかによって、局在化・非局在化される経験に分かれて見えることがある。他方で、しびれが局在化されることが、わからないという経験を生むと同時に、わからないなかで世界に能動的に向かっていく足場になっていた場面もあった。2点目は、一見動作が出来ているように見えたとしても、その動作が習慣化していくまでに時間を要するということである。そのことが、歩いたり立ったりという基本動作を常に意識して行わせることになり、「こわい」という不安を生じさせていた。3点目は、時間についてである。しびれ

## 博士学位論文内容の要旨

ている身体における時間経験が曖昧なものになり、つながらない時間の中に患者をおくことになっていた。また、しびれの改善が時間の経過と必ずしも比例しないことも示された。患者らは、様々な物との接触により、異常な冷たさや飛び上がるような違和感を経験しており、退院後は接触機会も増えるため、しびれがひどくなったように感じていた。